



<略歴>

1958年 平取町二風谷に生まれる。  
工芸家の父・貝澤勉や、地域の職人の中で育ち、高校卒業後に本格的に木彫りを始める。伝統を重んじながら、受け継いだ文様の中に自分の感性を積極的に取り入れ、新たな表現を生み出している。本映像では、代表作の一つ「UKOUK 2/ 輪唱」を制作。

貝澤 徹  
Toru  
Kaizawa

<受賞歴>

- ・北海道アイヌ伝統工芸展 北海道知事賞 (1989、2002、2005)
- ・アイヌ民族文化財団 工芸作品コンテスト優秀賞 (2005、2007) など、受賞多数。

## 「世界に誇れる アイヌ文様を彫る」

“現代は左右対称と「ウロコ彫り」を中心に向かって彫るが主になっていますが、先人の古い「イタ」を見ると自由ですね。自己表現なのか、曾祖父の「イタ」の中には自分の作品と認識できるような彫り方をしてあります。”

〔「UKOUK」の作品について〕

“ウコウクは、輪唱という意味ですが、時代や素材が変化しても、アイヌ文化は継承される事を表現しています。伝統とメッセージを入れた作品で国内外の人にアイヌ文化を理解してもらえる事を願っております。”



# わざ 技

Hands and Hearts  
vol.7





#### <略歴>

1940年 白老町に生まれる。  
旧アイヌ民族博物館にて、女性の手仕事を中心に、アイヌ伝統工芸品の復元制作に携った。白老民族芸能保存会の会員としても、アイヌ古式舞踊の伝承と保存にも尽力している。  
また、平成10年から、伝統工芸サークル「テケカラベ」を結成し、精力的に後進の指導・育成に取り組み続けている。

#### <受賞歴>

- ・アイヌ文化賞 (2021/ 当財団)
- ・文化賞 (2022/ 白老町)
- ・白老町伝統文化継承者認定 (2023/ 白老町教育委員会) など、受賞多数。

山崎 シマ子  
Shimako  
Yamazaki

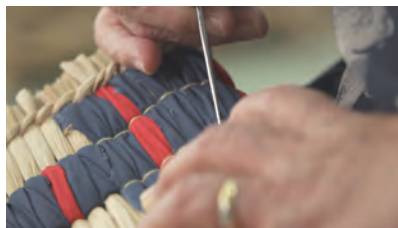
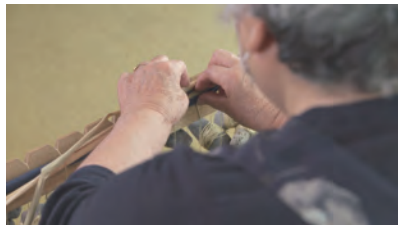
## 「素晴らしい文化を絶やさないでほしい」

“白老の（博物館で覚えた）アイヌの仕事はほとんど作っていますね。時間忘れて出来るという事は一日がすごく早いですからね。だからそれがいいのかなあ。新しいことじゃなく昔の人がやった事をずっと伝承していきたいなと思っています。”

#### （ゴザについて）

“文様のあるものは儀式用なので壁に掛けます。無地は下へ敷きます。そういう決まりがあるんですよ、アイヌは。まず石に糸を巻いて幅だけにかけていくんですよ、石をね。両方に巻いてかけていく。それでガマ・キナをのっけて一番下は布で包むんですよ。それで編み始めていきます。”

“紺だけだったらまたちょっと白と紺だから目立つんですけど、その中にちょっと赤入れた方が綺麗とかかわいいとかね。昔の人のマネをして赤を入れるようにしていますね。こういうのを作っているのが一番楽しいし、時間忘れて出来ますので。やっぱりこんな素晴らしい文化なので続けて欲しいと思っています。”



#### <略歴>

1951年 浦河町に生まれる。  
浦河町のアイヌ文化伝承者である、故・遠山サキさんの次女として生まれ、アイヌ文化が身近にある環境で育ち、自然の恵みを作品に表現し続けている。  
現在は阿寒湖温泉町にあるアイヌコタンで、アイヌ料理のお店「民芸喫茶ポロンノ」を家族で経営する傍ら、阿寒アイヌ民族文化保存会・阿寒口琴の会の一員として、アイヌ文化の発信にも尽力している。

床みどり  
Midori  
Toko

## 「楽しみながらアイヌ文化を残す」

“今回のこの木の皮は母が育てたオヒョウの木を使っています。木灰で煮たり温泉に浸けたりすると、いろいろな色の糸ができてそれも面白いかなと思ってやってみました。”

“糸を作るにあたって、層の分け目がわかればある程度薄く裂いて、カエカ用の糸を作っていきます。”

“カエカをしている時は何かを考えている時もあるし、無の時もあるし、どこから聞こえてくる街の音や風の音や自然の音が心地よく聞こえて時には昔のことも思い出します。”

“母から教わって作っていた当時のことをね。母と会話したり、まったりと色々な話をして笑ったり泣いたりしながら時を過ごしたことを思い出して、久しぶりに母にあった気がします。”

“こういう手仕事を母の様に何か残るような事ができたら。子どもや孫たちとアイヌ文化を共に楽しみながら、残す事ができたら嬉しいなと思います。”

